人文会ニュース

jinbunkai news
April 2017
NO. 126

1 15分で読む
レジリエンスという交差路（カルフール）
――「私の」から「私たちの」社会文化レジリエンスに向けて
阿部又一郎

20 書店現場から
今井書店外商部の営業活動について思うこと
古泉淳夫

26 図書館レポート
石川県西田幾多郎記念哲学館の歩み
中嶋優太

37 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑪
『トーマス・マン日記』全十巻について
伊藤暢章

www.jinbunkai.com

デザインってなんだろ?

松田行正

デザインを知ること　歴史を知ること

色、装飾、ロゴ、レイアウト、表現…博学の装丁家が、デザインや美的感覚の来歴を豊富なカラー図版と共に解説する。ハンディサイズで愉しむ美術の教養。　▶1800円+税

マーヤの自分改造計画

1950年代のマニュアルで人気者になれる?

マーヤ・ヴァン・ヴァーグネン　代田亜香子 訳

20か国で刊行の
ニューヨークタイムズ・ベストセラー

アメリカに暮らす現代のティーンが、自分磨きに奮闘した1年を綴った、「最高の学園映画みたいなノンフィクション」。山崎まどかさん推薦！　▶1700円+税

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

税別

自由と生存を
誰にでも
保障する社会の実現へ

大月書店 70th

社会権

人権を実現するもの

竹内章郎・吉崎祥司

生存、教育、労働を保障する憲法をもちながら、格差や不平等が広がり、豊かな福祉が実現しないのは何故なのか？　社会権を軽視してきた日本の法学・社会理論を批判的に検討。市民的自由権の限界と、社会権再生の意義を示しだす。　46判・3600円

東京文京本郷2-11 **大月書店** 電話03-3813-4651
otsukishoten.co.jp（メルマガ配信中）

慶應義塾大学出版会

http://www.keio-up.co.jp/

芸術の言語

ネルソン・グッドマン著／戸澤義夫・松永伸司訳　芸術を〈記号システム〉として解読する。絵画、音楽、ダンス、文学、建築……芸術へのアプローチを根本的に転換した20世紀美学の最重要著作。

◎4,600円

世界と僕のあいだに

タナハシ・コーツ著／池田年穂訳　これがお前の国なんだよ——。アメリカにあって黒人であるということ、この国の歴史を、この肉体と運命を生き抜くことを説く、父から息子への長い長い手紙。**全米図書賞受賞**　◎2,400円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

フリードリヒ・シュレーゲルの「生の哲学」の諸相

世間と協調することも時代と歩調を合わせることも生来苦手だった。いや、自分自身とうまく折り合ってゆくことさえ不得手だった一人の不器用な人物が書き残した世界探索の足跡。

菊判・七二六頁・定価(本体14000円+税)

酒田健一（早稲田大学名誉教授）

御茶の水書房

東京都文京区本郷5−30−20
tel 03-5684-0751　fax 03-5684-0752

―15分で読む―

レジリエンスという交差路（カルフール）
――「私の」から「私たちの」社会文化レジリエンスに向けて

阿部 又一郎（精神科医）

はじめに

日常生活のなかで、突然、何か想定外の出来事が起こる。その衝撃を受けて落ち込むこともあれば、怒りや悲しみを感じたりする。なかには、いずれ、こころの病気を患う者もいる。やがて立ち直ろうとすることもあれば、逆に自分の殻に閉じこもってしまう場合もある。精神医学や心理学研究における「レジリエンス」とは、一般に、困難や逆境にあっても、それを乗り越えて、自らを再び構築していく能力のことを表す。だが、この言葉は、現在さまざまな領域で使われているために、文脈によって指し示す内容も多様である。

本稿の執筆を勧めてくれた担当者からは、当初、「このところレジリエンスを標榜する書籍が多く刊行されているので、そもそもレジリエンスとは何なのか、それがどんなふうに広がって、現状の展開や受容はどんなことになっているのか書いてはどうですか」と提案されていた。レジリエンス概念は、時代によっても定義や使われ方が変遷している。そもそも、「レジリエンスとは～のことである」という語法が、通用しにくい領域である。

従って、以下の紹介も、極めて個人的（私的）なレジリエンス概念と、その関連領域の紹介であることを、あらかじめお断りしておく。現在のレジリエンス概念の関心

は、全般的に見ると、個人のレジリエンスから私たちの社会文化的なレジリエンス概念へと移行している。レジリエンス概念の多様さは、レジリエンスという隠喩の豊饒さでもある。この言葉を交差路（カルフール）として、専門間の領域横断性をおそれずに、まずは筆をすすめてみよう。

たくさんの How to 関連本…

今回、インターネット上でレジリエンスという言葉（あるいは訳語でそれに準じた日本語）で検索してみると、実にさまざまな領域で言及されて、たくさんの関連書が出版されているものだと改めて驚かされた。筆者がこの言葉と出会った10年前とは、すでに隔世の感がある。使用されることが比較的多い分野は、こころに関する専門領域（精神医学・心理学）や生態学から、「折れない（へこたれない）心」を育てる教育やビジネス教本までである。いずれの領域でも、必ずと言ってよいほど訳語上の問題が伴う。英語表記のresilienceの訳語は、日本語では統一されていない。カタカナ発音をとってみても、現在は「レジリエンス」が最も多いものの、他にもレジリアンス、レジリヤンス、リジリエンスなど、いくつか表記が見られる。それだけではなく、しばしばresilienceの邦訳として取り入れられている「回復力」、「復元力」、「打たれ強さ」、「へこたれない力」、さらには「強靭さ」、「逆境力」といった用語で、いま一度、ネット上で検索してみるとよい。それぞれをテーマに扱った著書や論文は、枚挙にいとまもないほどである。どの訳語が採用されているかは、領域に応じて、または著者や訳者や出版社の意向もあるだろう。つまり、レジリエンスという言葉には、取り上げる者の関心や視点によって、ひとつの、いやむしろ複数の物語がある。たったひとつのレジリエンス概念がある、と信じ込ませようといざなうことが、この言葉が今日、これだけの成功を収めた理由のひとつとされている。

精神医学、臨床心理における諸レジリエンス

精神医学や発達心理領域では、さらに頭を悩ませる問題が加わる。それは、レジリエンス概念の推奨者のなかに、当初は強い関心と問題意識を持っていながらも、概

念や研究が展開されるうちに、だんだんと、この言葉の使用を放棄してしまった専門家たちがいるからだ。例を挙げると、英国児童精神医学の大御所とされるマイケル・ラターや、のちほど紹介する精神分析家ピーター・フォナギーなども、当初はこの言葉を用いて考察を試みていた。彼らの著作を読むと、それ自体が、レジリエンスが指し示すものに関する重厚な教科書である。ラターの英国におけるルーマニア孤児の養子縁組の長期観察の報告書(『イギリス・ルーマニア養子研究から社会的養護への示唆――施設から養子縁組された子どもに関する質問』福村出版)など、その実践全体を通じて、レジリエンスが扱われていると言ってもよい。20世紀後半以降、主にハイリスクとされる子どもを対象にレジリエンスを調べる調査がさかんに実施されるようになった。エミー・ウェルナーのハワイ近郊の島での子どもの発達に関する疫学調査や、先述したラターらのイギリス・ワイト島に住む児童を対象にした精神疾患の発症頻度に関する調査、ノーマン・ガルムジーらの統合失調症を患った親を持つ子どもの適応に関する研究などである。こうした研究は、主に防御因子としてのレジリエンスを調べることを目的としていた。

ここで、こうした先行研究の影響を受けた、仏語圏におけるレジリエンス概念の広がりについてみてみよう。フランスでは、1980年代に、この言葉が英米圏から再導入されるようになった。「再」というのは、この言葉がもともとはラテン語から派生しているからである。仏語圏の精神医学・心理学におけるレジリエンス概念の受容と伝達に関しては、まず第一に、精神科医のボリス・シリュルニクの貢献が大きい。シリュルニクは、トラウマを受けた子どもの療育環境や発達面を重視してきたラターらの観察研究に着目し、レジリエンスを「逆境やトラウマからの絶え間ない回復力、抵抗力」と定義して、一連の作品を発表してきた。そして、逆境やトラウマを体験した子どもが、どのような出会いであれ、外部に導く存在(シリュルニクの表現だとレジリエンスの導き手 tuteur de la résilience(英語ではケアギバー care giver))があり、感情・情緒的な人間関係を結べて自らを表現する場があるとレジリエンスが発揮されると考えている。邦訳されているシリュルニクの代表作のひとつ『妖精のささやき――子どもの心と打たれ強さ』(彩流社)などを読む

と、本の語り口も特徴的であることがわかる。いくつもの短い断片的な章立てで構成され、各節のタイトルひとつひとつも、読者に向けて語られているような、簡潔で心に響くメッセージとなっている。シリュルニクは、レジリエンスを発揮した(またはできなかった)多くの子どもの事例を、物語のように記述しながら、自らの専門のみならず他領域の最新の知見(神経認知科学、行動学、愛着(アタッチメント)理論、精神分析など)を交えて説明していく。この知的でわかりやすい物語性が重要である。例えば、「物語化は引き裂かれた自己の破片を縫い合わせてくれる」、「フィクションは説明よりもずっと強い信念の力をもつ」などの章と事例を読めば、トラウマの治療にかかわる援助者、当事者たちは、思わずはっとさせられるだろう。ポーランド系ユダヤ人としてのシリュルニク自身、第二次大戦中にナチスのホロコーストで両親を失った孤児である。その後の孤児院での生活など、彼自身のレジリエントな個人的体験の詳細は、自伝的色彩のより強い最近の著作(『憎むのでもなく、許すのでもなく――ユダヤ人一斉検挙の夜』、『心のレジリエンス――物語としての告白』いずれも吉田書店)でも描写されている。訳者も、「『語り継ぐことの重要性』を使命として見出し、凍った言葉を溶かすきっかけになる、あるいは身の回りの溶け始めた言葉に耳を傾ける契機になれば」と、あとがきで願っているのが印象的である。

その一方で、安易な語りや傾聴ブームは、危険を伴う。それは、レジリエンスとみなされていても、むしろ過剰な愛他性といった別の病理の表出のこともあるからだ。精神科医で精神分析家のセルジュ・ティスロンは、精神分析理論のなかでレジリエンス概念の位置づけを検討する。『レジリエンス――こころの回復とはなにか』(白水社)では、この言葉の定義や使用法をめぐるさまざまな相違点について総括的に解説され、特に20世紀後半から発展した、主に精神医学・心理学領域におけるレジリエンス研究の歴史を振り返ることができる。フランス社会において、どのようにこの言葉が人々を引きつけ、受け入れられていったのか。そして、この言葉が今日大きな成功を収めたのはどうしてなのか。それは言葉が喚起するイメージの力であると指摘するティスロンは、映画やマンガ、写真などの表象イメージ論についても造詣が深く、わが国では表象文化の論客として紹介されて

きた。女性の情熱を描写してきたフランスの現代作家アニー・エルノーや、世界中に熱狂的ファンの多い人気マンガ「タンタン」シリーズを描いたベルギーの漫画家エルジェに隠された家族の秘密をめぐる病跡学的考察(『恥――社会関係の精神分析』法政大学出版局、『タンタンとエルジェの秘密』人文書院)など、ティスロンの一連の著述は、とりわけ、ハンガリー出身で、のちにフランスで活動したニコラ・アブラハムとマリア・トロークの精神分析理論の影響を強く受けている。彼(女)らは、重篤なトラウマ体験の個人レベルでの取り込みと体内化という問題、世代間にわたって飛び地するという亡霊(ファントム)概念に影響されつつ、トラウマの世代間伝達の問題などを論じている。フランスにおけるレジリエンス概念は、困難な状況を抱えた主体(患者)、あるいは語られた言葉や語りえないしぐさや振る舞いを通じて、トラウマを背負った子どもを、社会が治療・看護・教育まで責任を持って多職種チームで継続的に引き受けようとする治療姿勢がよく反映されている。それでは、日本では、どのような展開を辿っているのだろうか。

日本の精神医学的「レジリアンス三部作」

2000年代半ばから、日本の精神医学や心理臨床分野においてもレジリエンス概念が注目されるようになった。2010年前後には、いくつかの専門雑誌で特集が組まれている。筆者の知る限り、精神医学においてレジリエンスそのものをテーマに論文集として最初に出版されたのが、金原出版から2009年より出版された『レジリアンス』三部作である。それぞれ『レジリアンス』というタイトルに加えて、発刊順に『現代精神医学の新しいパラダイム』、『文化、創造』、『症候学・脳科学・治療学』という副題が付けられている。精神科医の加藤敏と八木剛平の編纂(三冊目は渡邊衡一郎が加わる)で、加藤は構造論的精神病理学、八木は精神科薬物療法のネオヒポクラティズムを長らく提唱してきた。渡邊は服薬アドヒアランスにおける治療関係に基づくShared Decision Making(共同意思決定、SDM)を啓発していることでも知られる。上記の三部作では、精神医学のいろいろなサブスペシャリティにおける諸レジリエンス研究が

紹介されている。シリーズ編者の加藤によれば、用語をレジリエンスではなくレジリアンスと表記したのは、前者は英語読み、後者が仏語読みに近く、「『…アンス』のほうが発音しやすいのではないかという単純な理由から」、後者を採用したとのことである。ここで、「発音のしやすさ」、あるいは「耳に響きのよい言葉」である点は、案外と重要だろう。というのも、仏語で「アンス」という語尾の響きからは、英語の「リライアンス(信頼)」のほか、「スルヴィヴァンス(生き残ること)」、「レジスタンス(抵抗)」といった用語が、すぐさま連想されるからだ。これらは、冒頭で述べたようにレジリエンスが発揮されるうえで、極めて重要な価値を帯びた要素と考えられている。

レジリエンスは、こころの治療を扱うなかで、伝統的に自然治癒力を重視する姿勢とも相通じるとされる。加藤は、その後の自身の論文集(『精神病理・精神療法の展開――二重らせんから三重らせんへ』中山書店)などでも、うつ病に対する抗うつ薬の効果に対する実証研究報告を紹介しつつ、プラセボ(偽薬)効果にも強い関心を寄せている。プラセボ効果は、実証研究のなかでは「余計なもの」として切り捨てられるものであったが、実臨床では、疾患に固有の神経系の機能失調を元に戻す「自己復元力」、つまりそれぞれのレジリエンスの回路を作動させる作用を持つという考えを導き出している。プラセボや瞑想効果などは、従来の客観性を重視する実証科学のなかでは排除されてきた要素であるが、最近の脳画像研究の発展とともに改めて注目されるようになっている。レジリエンスは、脳科学(ニューロサイエンス)との相性がよく、エビデンスとして示されるうえで利用される傾向がある。

このように、近代精神医学のある種の限界や切り捨てられていた側面に対して、レジリエンスという視点を得ることで、新たなパラダイムに向かおうとする動きがある。ただこれには、「レジリエンスを持てるもの」、「持たざるもの」と、人間を二分化するリスクを常に孕(はら)む。医療やケアの支援の質が、効率や適性効果という視点から配分決定されることとなる。レジリエンスという言葉には、個人や組織の価値観が入り込みやすいことも問題とされている。そのせいか、例えば学会やシンポジウムを開催しても、結局のところ「レジリエンスって大事ですよね」という結論が先にありきとなって、なかなか

議論が深まらないのが現状である。トラウマに対する抵抗力、脆弱性がしばしば問題となるPTSD（心的外傷後ストレス障害）のように、レジリエンスという用語や概念の位置が比較的捉えやすい対象や領域は、確かにある。英米圏では、双極性障害と関連するレジリエンス因子を研究する報告が散見される一方で、わが国の精神医療では従来、レジリエンスよりも、むしろ精神疾患（主に統合失調症）に罹患しやすい脆弱性〈ヴァルネラビリティ vulnerability〉に強い関心が向けられていた。最近、本邦では脱スティグマの視点から、統合失調症のレジリエンスが改めて提唱されていることは注目に値する。統合失調症もスペクトラム概念が導入されつつあり、その多様性のなかに個別性が見出されるとよいと思う。

病跡学から、システム的病理学へ

病跡学では、従来から積極的に作品や作家との関係性や、文化の集団心性などが論じられる。前述した三部作中でも、レジリエンスと創造性との関係性がいくつか論じられている。なかでも、オートポイエーシス理論の独自の展開で知られる哲学者の河本英夫は、舞踏家の土方巽や荒川修作などの作品を例に挙げている。河本によると、レジリエンスはシステムの特質として、自己組織化の議論から取り出しうる機構と、ほぼ重なるという。経験とは本来、弾力があって、可動域の自在な拡張、収縮があるものだ。レジリエンスは見かけ上、病因論的な「脆弱性」に対して、治癒論的な「抵抗力」、「回復力」を対置しているように見える。しかし実際には、因果関係ではなくて、より高次の自己組織化的なシステムの機構の導入となっている。多くの作家や芸術家たちが、困難に直面するなかで日々新たな自己を生成して躍動感のある精神を保ち、自身の新たな可能性を切り開いてきた（『〈わたし〉の哲学――オートポイエーシス入門』角川選書）。病跡学研究が、河本の指摘するように、創造物や芸術的作品のなかにレジリエンスの仕組みを読む込む手法であるとすれば、それでは巷間よく用いられる「昇華」という言葉とは、どのように異なるのだろうか。昇華とレジリエンスを同列に置くことに、例えばティスロンなどは慎重な姿勢を崩していない。この点を考えるにあたり、臨床心理士の堀川聡志は、精神分析におけるさまざまな昇

華理論を臨床的な観点からまとめていて（『精神分析と昇華――天才論から喪の作業へ』岩崎学術出版社）、問題の整理に参考になる。

ジェルメーヌ・ティヨン

上述した「生き抜くこと（スルヴィヴァンス）」という連想から、シリュルニクや多文化間精神医学者のマリー・ローズ・モロなどが、レジリエンスを発揮した人物として挙げているジェルメーヌ・ティヨンについて紹介する。この卓越した女性人類学者は、日本では生前あまり知られてこなかった。だが、フランスでは亡くなった際に国葬されたほど、戦後フランス社会に影響を及ぼし、かつ多くの尊敬を集めた人物であった。1907年にフランスのアレグレに生まれたティヨンは、フランスを代表する民族学者、レジスタンス活動家、人権活動家である。1934年より、マルセル・モースの勧めでアルジェリアのオーレス山塊地方で、20代～30代にかけて、ほぼ単独で長期のフィールドワークを行った。これだけでも十分にレジリエントな人物であるが、ティヨンは続けて、1940年頃からレジスタンス活動に参加し、1942年にラーフェンスブリュック女性強制収容所に収容された。ティヨンは、ナチス強制収容所の地獄を生き延びた戦後も、母国フランスの行う植民地戦争への抵抗（レジスタンス）を続けた。1958年から高等研究院で教鞭をとり、主著である『イトコたちの共和国――地中海社会の親族関係と女性の抑圧』（邦訳はみすず書房）を刊行した。同じく、政治的圧制という逆境を耐え抜いた思想家であるツヴェタン・トドロフも、敬愛をもってティヨンについて紹介している（『悪の記憶・善の誘惑――20世紀から何を学ぶか』『ジェルメーヌ・ティヨン――レジスタンス・強制収容所・アルジェリア戦争を生きて』どちらも法政大学出版局）。そこでは、家族や仲間を失いながらも、全体主義・植民地主義のもたらした暴力と憎悪に尊厳をもって立ち向かった女性の断片的な自伝が再構成されている。彼女はその際に、いわゆる「英雄的な物語」も「犠牲者の物語」も拒絶して「悲劇的な物語」を選択する。この場合の悲劇とは、すべての犠牲者に自己を同一化するだけではなく、それぞれの側の悪の当事者にも同一化することである。ティヨンはまさしく、圧倒的なトラウマや暴力に「抵抗し」、「生き

抜いた」女性人類学者であったといえよう。

虐待・ネグレクトとレジリエンス

「15分で読む」シリーズでは、すでに精神科医の宮地尚子によって、トラウマをめぐる読書案内の地図が描かれている（「人文会ニュース」109号）。そのなかでも紹介されていた森茂起は、最近とある雑誌で、「レジリエンス再考」という興味深い特集を組んでいた（『子どもの虐待とネグレクト』17巻3号、岩崎学術出版社、2015）。森は、トラウマが20世紀社会で発見される歴史や、ハンガリーの精神分析家フェレンツィの著作の本邦への紹介で知られる（『トラウマの発見』講談社選書メチエ、『精神分析への最後の貢献――フェレンツィ後期著作集』岩崎学術出版社）。主に教育現場で虐待にかかわる援助者らにとっても、レジリエンス概念の重要性は共有されていながら、具体的にどのように実践や研究で扱えばよいのか判然としないまま経過しているのが現状に見えるという。特集では、実践的文脈においてレジリエンス概念が有効と思われる二つの方向について示されていた。それは、①「虐待に対するレジリエンスとは何か」という視点から予防・防止策を考える方向と、②「虐待は子どものレジリエンスを下げる」という視点に立ち、レジリエンスを高める回復支援を目指す方向である。このように、時に混乱を招く「虐待とレジリエンスの関係」を再整理して、実践への示唆を得ることを目指すことが貴重である。

外傷後成長（的育ち）とメンタライゼーション

レジリエンス概念の導入により、カタストロフが起きても、それが発生する前よりも、後のほうがはるかに良くなれる、と考えられるようになった。こうした、トラウマやカタストロフ（破局）を受けたことで成長できるという視点に立ち、「外傷後成長 post traumatic growth」あるいは「外傷的育ち traumatic upbringing」などとして重視する臨床家たちがいる。例えば、『メンタライゼーションでガイドする外傷的育ちの克服――〈心を見わたす心〉と〈自他境界の感覚〉をはぐくむアプローチ』（星和書店）によると、外傷的育ちとは、子どもの頃に虐待（身体的・心理的・性的虐待、ネグレクト）を受けた体験、

それに加えて過度な支配や制限、自主性の剝奪や従属の強制、外傷になるような離別や死別など、心や脳にダメージを与えるような養育体験とその影響のことを指す。ここでは、レジリエンスではなくて、「メンタライゼーション mentalization」という言葉が鍵概念として使われている。メンタライゼーションとは、自己・他者の言動・行為を、心理状態(欲求・感情・信念)に基づいた意味のあるものとして理解することを意味する。英国の心理臨床家フォナギーとベイトマンらは、境界性パーソナリティ障害に苦しむ患者に対して、実証的に支持された力動精神医学的精神療法としてメンタライゼーションに基づく治療理論を提唱してきた。フォナギーは、数十年来、精神分析学と認知神経学、アタッチメント理論、遺伝学との統合を実現させようと試みている(『愛着理論と精神分析』誠信書房)。こうした諸領域の概念をつなげるような試みは重要である一方で、「メンタライゼーション」という用語がやはり問題とされよう。実際、フォナギーたちも当初は、これらをレジリエンスという言葉で表現すべく思考を展開した時期があった。そうしなかったのは、認知神経科学者と精神分析の双方の領域に、将来的により受け入れられやすいよう配慮した言葉を選んだとされる。

象徴化とクリプト

フランスでは、心身医学的な視点に立つ精神分析学派のなかで、以前からメンタライゼーション mentalizationという言葉が用いられていた。先に紹介したティスロンは、こうした概念の混乱を懸念して、むしろ象徴化という言葉を用いたほうが妥当であろうと提言している。ティスロンが依拠する精神分析家ニコラ・アブラハムは、恥という情動と象徴化のプロセスおよび体内化の問題について、現象学、精神分析の視点から掘り下げようとした。難解で知られるアブラハムとトロークの論考集『表皮と核』(松籟社)は、『狼男の言語標本――埋葬語法の精神分析』(法政大学出版局)につづいてようやく邦訳出版されて、近年とみにその重要性を増している。臨床家と思想家の双方にとって、例えば、内海健や十川幸司、守中高明らが、それぞれの問題意識のなかで取り上げている。内海の著作は、うつ病やメランコ

リーを再考するうえ(『さまよえる自己――ポストモダンの精神病理』筑摩選書)で、十川は『来るべき精神分析のプログラム』(講談社選書メチエ)における鍵要素として。守中の著作(『ジャック・デリダと精神分析――耳・秘密・灰そして主権』岩波書店)でも、クリプトという概念をもとに考察がすすめられている。いずれも、科学的エビデンスが蔓延する精神医学の現状と、心理臨床の医学化に批判的である。アブラハムの死後、トロークは、臨床研修会などでレゾナンスという言葉をよく用いていたといわれる。個人的には、これが実地臨床的な意味でのレジリエンスに最も近しい気がしているのだが、果たしてどうだろうか。トロークは、アブラハムの死後、彼の甥のニコラス・ランドとの共著で文学精神分析という興味深い取り組みも行っている(『フロイトの矛盾――フロイト精神分析の精神分析と精神分析の再生』書肆心水)。

レジリエンスと政治家の病跡学

米国の精神科医ナシア・ガミーの著作は、京都学派の流れを汲む精神医学者の村井俊哉らによって次々と紹介されている。ガミーの一般向けの著書『一流の狂気――心の病がリーダーを強くする』(日本評論社)では、主に双極性障害に関連して政治家の病跡学に焦点が当てられ、米国での最近のレジリエンス研究として注目される。社会が平穏なときには、「正気のリーダー」が活躍する。しかし普通でない大きな危機に対しては、狂気の指導者が必要とされる。実際に、偉大なリーダーの多くが精神の病を抱えていた。だからこそ、彼らは非凡な決断と行動で人々を導き、歴史に残る偉業を成し遂げることができたのだと。本書では、チャーチル、キング、ローズヴェルト、ケネディ、ヒトラーといったリーダーたちの人格に大きな影響を及ぼした病歴を、症状、遺伝、疾患の経過、治療の四つの側面から辿っている。ガミーによれば、精神疾患のなかでも躁病とうつ病には、しばしば①リアリズム、②レジリエンス、③エンパシー、④創造性の四つの能力を高める場合があるという。危機に直面したときに超人のような指導力や行動力を発揮するリーダーたちの多くが、今日、双極性障害とみなされる気質を備えているのは偶然ではなく、むしろその気質ゆえに歴史的英雄として名を残すようなリーダーになれたのだ

というのが本書の指摘するところである。

偽性レジリエンス?

ただ、それ以上に衝撃的なのは、ナチスの指導者たちの多くが、精神的に極めて健康であったという事実である。知性と権力を手にした平凡人は傲慢になる、しかも自分ではそれに気づかないうちに。これが、『イェルサレムのアイヒマン――悪の陳腐さについての報告』(みすず書房)で描かれた、アーレントの言う悪の凡庸さである。ヒトラーという指導者のカリスマ性を受け容れたナチスの指導者たち、そしてドイツ国民のほとんどは精神的に健全だった。そのことから本書は「最も健康な者のうちにも暴力が潜んでいる」と警告し、ナチスに支配されたドイツだけが特別な状況にあったわけではないことが恐ろしいことであると指摘している。

精神科医の斎藤環もまた、『「人間」にとって健康とは何か』(PHP研究所)のなかで、ガミーの著作に触れつつ政治家のレジリエンスを論じている。そのなかで、ヒトラーという人物を、逆説的だが、恐ろしく健康度が高くレジリエントな人物であったという評価を下している。斎藤は、日本の政治状況や社会の雰囲気を批評するなかで、日本文化のレジリエンスの高さについても指摘する。そして、ここから導き出されるのが彼の文化論的な想定であるが、日本のレジリエンスは、ひとえに「ヤンキー文化」であるという。それゆえに、「変われば変わろうとするほど、変わらない」ことを内包したシステムであると指摘する。さらには、日本の政治家には、しばしば高い健康度を備えた「悪」の要素が見られることを見て取る。

どうなのだろうか。ただ、これを書いている2017年現在、太平洋をへだてた先の大陸では、数々の逆境をはねのけて、それでも「へこたれずに」立ち上がって数多くの事業を起こし、強い影響力を及ぼしている人物がいる。言うまでもなく、その発言や動向が最も世界的に注目を集めている、米国第45代大統領ドナルド・トランプである。日本でも彼の自伝や解説本が次々と出版されるようになった(『トランプ自伝――不動産王にビジネスを学ぶ』ちくま文庫)。彼がレジリエントであるのか、または、そのような文脈で語られるのかどうかは、これから

の顚末にもよるだろう。ただそうなると、レジリエンスが、後付けの価値観を本質的に内包することを意味するのだが。

社会文化レジリエンスに向けて

レジリエンスは、ほぼすべての領域において、起こりうるカタストロフに備える、という共通の心構えをもたらすようだ。レジリエンスは社会文化的な概念と不可分である。以下、「私の」から「私たちの」レジリエンスとなるべく、いくつかの近接領域に簡潔にふれて締めくくりとしたい。

1　文化・医療人類学的視点

かつて、文化人類学者の山口昌男は、「潜在的凶器としての日常生活」における、皮相な意味での正常な日常を送る万能主義者の過剰防衛が、いかに脆弱な者たちを排除する加害行動となって現れるかを考察した。これと対置して、山口はレジリエンスに近い言葉として弾力性を使用している。周縁的諸力を自らのものとして生きることのできない、自力ではアイデンティを構成する枠組みを維持できない者たちを、弾力性のない人間と世界、と表現している。中心と周縁、内と外、境界といった、現在の日本のレジリエンスをめぐる議論で、しばしば欠落しがちな視点をすでに提示していた(『文化の詩学Ⅰ』岩波現代文庫)。精神医学と医療人類学との遭遇のなかに身を置いて考察を続けている下地明友は、レジリエンス概念の転回の潜勢力は、精神医学とその医療自体を対象とする相対的な視点が育まれるという地平を開くことにあると提言する(『〈病い〉のスペクトル――精神医学と人類学の遭遇』金剛出版)。レジリエンスには「回復」という名のストーリーが潜在する。その一方で、病いや疾患には、単一の視線のみでは語りえない錯綜した「混沌」という側面がある。下地は、道標がすでに用意されているような回復の物語を超えた、「探究の語り」や「混沌の語り」を排除しない実践的レジリエンスに、この概念の今後の発展の可能性を見出している。これに対して、先の斎藤環と同じく北中淳子は、レジリエンスの概念が「正常」概念を置き換える倫理観として台頭していることに疑念を示している(『うつの医療人類学』日本評論社)。

2　治癒の哲学・回復論として

デリダの後継者ともみなされているカトリーヌ・マラブーは、以前より脳科学の言説に関心を寄せてきた哲学者である(『わたしたちの脳をどうするか――ニューロサイエンスとグローバル資本主義』春秋社、『新たなる傷つきし者――フロイトから神経学へ　現代の心的外傷を考える』河出書房新社)。現在、フランスを離れて英国で活動する彼女は、ヘーゲルの諸テクストを再検討した可塑性の概念を、神経科学の言説を媒介にして、新たな主体の概念として読み取っている。マラブーは、シリュルニクのレジリエンス概念にも関心を寄せつつ、レジリエンス概念が、果たして、破壊と構築という二つの可塑性を救い出すことに役立つのかどうか問いかける。マラブーは、レジリエンスを「形の消滅からの自己形成の論理」であるとみなし、破壊の脅威に抗いながら、同時にこの脅威とともに発達する自己の再構築、あるいは再構成の心的プロセスと規定する。そして、記憶と忘却の総合、形の形成と消滅の総合という、二つの矛盾した構築の仕方があると考察する。だが、レジリエンス概念が、可塑性の肯定的(ポジティブ)な意味にのみ結びついたままである限りは、構造化された形成作用、一貫性を持った変化という意味だけを持つ可塑性と同義である。現状、流布しているレジリエンス概念では、可塑性と弾性が混同されており、補塡と修復による世界の創出としての病の側面が、繰り返し強調されてしまっている。マラブーは、否定的可塑性が排除されたレジリエンス概念には、何か決定的に本質的なものが欠けているとして、これを批判する。代わりに、脳の特性(セレブラリテ cérébralité)という独自の概念を練り上げて、反復強迫の可塑性について考察しようと試みている。脳科学と精神分析の諸言説を視野に入れながら、新たな治癒の哲学を展開していく者にとって、レジリエンスとは、一度は通り過ぎる、いわば通過儀礼かもしれない。

3　社会学的視点

レジリエンスに関心を寄せて、その要素やプロセスを強調し、実証することは、逆説的に、「非レジリエントな人々」が不可視化される危険性がある。ファビエンヌ・ブルジェールは、ケアの倫理と脆弱性をめぐって考察をすすめているフランスの哲学者のひとりである。彼

女は、決められた枠組みのなかに、自分たちの居場所がないと感じて、自らの夢や計画をとても展開していけそうにない個人を考慮するうえで、レジリエンスではなく、あえて再び「脆弱性」という用語を用いている(『ケアの倫理――ネオリベラリズムへの反論』白水社 文庫クセジュ、『ケアの社会――個人を支える政治』風間書房)。そこでは社会的脆弱性が、心的な脆弱性、すなわち、排除されている感情や不安などと二重になっていることが示されている。ブルジェールは、脆弱性という概念を、従来のように限定的に用いるのではなく、米国のアマルティア・センやマーサ・ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチをも参照しつつ、社会経済的な問題へと広がりを持った概念として議論を展開している。精神医学的なレジリエンス概念が、ポジティブな側面を強調しがちであるのに対して、社会学者のロベール・カステルや、フランクフルト学派の第三世代と評されるアクセル・ホネットなどは、精神分析概念を導きの糸として、むしろ貧困や不可視の人々への平等や公平を問題にして「社会的なもの」をめぐる思考を展開してきた。ちょうど、いまの過労自殺の問題の再認識から唐突に始まった感のある「プレミアム・フライデー」は、不可視な人々に対して向けられた社会運動になるのだろうか。

4　環境哲学、エコロジー

環境哲学、エコロジーの分野でも、レジリエンスが注目されている。アフォーダンス理論を紹介してきた河野哲也は、レジリエンス概念をプロセスと考え、その特徴として、それが自己と環境との動的な調整にかかわるものと指摘する(『境界の現象学――始原の海から流体の存在論』筑摩選書)。レジリエンスの獲得には、当人や当該システムの能力の開発のみならず、その能力に見合うように環境を選択したり、現在の環境を改変したりすることも求められる。個人であれ社会であれ、ケアする側がすべきことは、各個人にレジリエンスを獲得できるように個人と環境に働きかけることである。環境にはこの場合、ノンヒューマンなものも含まれる。篠原雅武もまた、建築や都市論を通じて、自分への配慮(ケア)と、ヒトとモノを含んだ他なる存在との結びつきについて考察を始めている(『複数性のエコロジー――人間ならざるものの環境哲学』以文社)。著者は、モダニティの終焉からエコロジカルな

時代へと向かっている現代に、ヒトの生きる空間そのものが「うつの空間」と化して、「生きづらさ」を感じていると指摘する。日本ではまだそれほど知られていない哲学者ティモシー・モートンや、かつての多木浩二の評論を導き手として、個人的にも社会的にも、絆で表されるものとは別様の新たなつながり方を模索しているようである。

5　カタストロフの哲学

ジャン＝ピエール・デュピュイ『ありえないことが現実になるとき――賢明な破局論にむけて』(筑摩書房)は、私たちに、〝想定外〟はなぜ起きるのか、大惨事を回避するために今、私たちに必要な思考のプロトコルについて教えてくれる。他にも、レジス・ドブレ『大惨事(カタストロフィー)と終末論――「危機予言」を超えて』(明石書店)では、カタストロフィーに見舞われる現代社会の危機に、宗教的古層に立ち戻って、時代を超える象徴化と世界の賦活の力の源泉を求めようとする姿勢を示している。レジリエンスという言葉は、次の共通の考え方をもたらす。それは、カタストロフに備えること。個人的であると同時に集合的にカタストロフに向き合うこと。その出来事を、より受け入れ可能な状況を再構築する手段として活用すること。これらを達成するうえで、リスク文化と称される概念と不可分となる。

カタストロフにみながどう対処するのか、あるいはどう描いてそれが伝えられるか、という点で、２０１６年の日本で最もインパクトを与え、かつ大ヒットした邦画が三つあった。それらは、『シン・ゴジラ』、『君の名は。』、『この世界の片隅に』で、すべてアニメや特撮によるイメージである。斎藤環は、ある雑誌での論考で、これらを、２０１１年の震災後の日本社会におけるトラウマへの固有の折り合いのつけ方であり、イメージを媒介とした集団的(コレクティブ)な自己治癒の試みとして捉えている(ユリイカ２０１６年12月臨時増刊号『総特集Ω「シン・ゴジラ」とはなにか』青土社)。しかし何もそれは、２０１１年の震災に限ったことではない。戦後のゴジラという怪物的表象は、過去をさまざまに語るための豊かな記憶装置として機能して、いまだ多くの者たちに多くの記憶を語らしむる源泉となっている。個人としても社会的にも、来るべきカタストロフへの備えとして、

想定外の困難なときにレジリエンスが引き出されるようなリスク文化を、私たちはいかにして再構築していくのだろうか。

終わりに

レジリエンスは、たくさんの顔を持ち、その言葉を用いる人の関心によっていろいろと取り出せる、ブリコラージュのためのいわば道具箱（ガラクタ入れ）である。今後の可能性として、個人から社会文化レジリエンスの再構築が促されている。レジリエンスとは交差路のようなものだ。そこには、いろんなヒトやモノが通り過ぎていき、時に立ち止まりつつ、次の経由地や目的地に移動していく動的なイメージである。その場は、時には暴力の標的となる危険や破壊性も伴うのであるが、この言葉を通じて出会う人たちや、再認識される分野や概念も少なくはない。今回、比較的最近、日本語で出版されたテキストを中心に、多岐にわたって連鎖的に関連書籍を紹介することができた。勿論、他にもさらに見出すことができよう。価値観を含んだこの言葉の使用を避けることが多かったのであるが、この言葉が私たちに喚起するものについて、触れたり感じたり、考えることを放棄せずに、声低くとも対話を絶やさないことは、やはり大切なことだと思うようになってきている。

阿部 又一郎（あべ ゆういちろう）
1974年生まれ。千葉大学医学部卒業。精神保健指定医、精神科専門医取得後、渡仏（フランス政府給費生）。専門は臨床精神医学。東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科博士課程修了（医学博士）。
現在、東京医科歯科大学精神科、東洋大学文学部非常勤講師。
主な共著訳書に『レジリアンス――現代精神医学の新しいパラダイム』（分担執筆、金原出版、2009年）、『フランス精神分析における境界性の問題――フロイトのメタサイコロジーの再考を通して』（共訳、星和書店、2015年）、『ケアの社会――個人を支える政治』（共訳、風間書房、2016年）、『双極性障害の対人関係社会リズム療法――臨床家とクライアントのための実践ガイド』（監訳、星和書店、2016年）、『稲妻に打たれた欲望――精神分析によるトラウマからの脱出』（分担訳、誠信書房、2016年）、『レジリエンス――こころの回復とはなにか』（訳、白水社文庫クセジュ、2016年）。

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
松籟社	4879843265	表皮と核	ニコラ・アブラハム、マリア・トローク（大西雅一郎、山崎冬太監訳）	4200	2014
法政大学出版局	4588008504	狼男の言語標本――埋葬語法の精神分析	ニコラ・アブラハム、マリア・トローク（港道隆・森茂起・前田悠希・宮川貴美子訳）	3300	2006
筑摩選書	4480015440	さまよえる自己――ポストモダンの精神病理	内海健	1600	2012
講談社選書メチエ	4062584234	来るべき精神分析のプログラム	十川幸司	1600	2008
岩波書店	4000611572	ジャック・デリダと精神分析――耳・秘密・灰そして主権	守中高明	2900	2016
書肆心水	4906917556	フロイトの矛盾――フロイト精神分析の精神分析と精神分析の再生	ニコラス・ランド、マリア・トローク（大西雅一郎）	4900	2016
日本評論社	4535984264	一流の狂気――心の病がリーダーを強くする	ナシア・ガミー（山岸洋、村井俊哉訳）	2600	2016
みすず書房	4622020092	イェルサレムのアイヒマン――悪の陳腐さについての報告	ハンナ・アーレント（大久保和郎訳）	3800	1969
PHP研究所	4569830841	「人間」にとって健康とは何か	斎藤環	800	2016
ちくま文庫	4480423795	トランプ自伝――不動産王にビジネスを学ぶ	ドナルド・トランプ、トニー・シュウォーツ（相原真理子訳）	840	2008
岩波現代文庫	4006000875	文化の詩学Ⅰ	山口昌男	1200	2002
金剛出版	4772414548	〈病い〉のスペクトル――精神医学と人類学の遭遇	下地明友	5800	2015
日本評論社	4535984127	うつの医療人類学	北中淳子	2400	2014
春秋社	4393322239	わたしたちの脳をどうするか――ニューロサイエンスとグローバル資本主義	カトリーヌ・マラブー（桑田光平・増田文一朗訳）	2100	2005
河出書房新社	4309247670	新たなる傷つき し者――フロイトから神経学へ　現代の心的外傷を考える	カトリーヌ・マラブー（平野徹訳）	3400	2016
白水社 文庫クセジュ	4560509876	ケアの倫理――ネオリベラリズムへの反論	ファビエンヌ・ブルジェール（原山哲、山下りえ子訳）	1200	2014
風間書房	4759921328	ケアの社会――個人を支える政治	ファビエンヌ・ブルジェール（原山哲、山下りえ子、阿部又一郎訳）	1500	2016
筑摩選書	4480016027	境界の現象学――始原の海から流体の存在論	河野哲也	1500	2014
以文社	4753103355	複数性のエコロジー――人間ならざるものの環境哲学	篠原雅武	2600	2016
筑摩書房	4480847232	ありえないことが現実になるとき――賢明な破局論にむけて	ジャン＝ピエール・デュピュイ（桑田光平、本田貴久訳）	2800	2012
明石書店	4750339702	大惨事（カタストロフィー）と終末論――「危機の預言」を超えて	レジス・ドブレ（西兼志訳）	2600	2014

15分で読むレジリエンス・ブックガイド

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
福村出版	4571420481	イギリス・ルーマニア養子研究から社会的養護への示唆――施設から養子縁組された子どもに関する質問	マイケル・ラター他（上鹿渡和宏訳）	2000	2012
彩流社	4779112607	妖精のささやき――子どもの心と打たれ強さ	ボリス・シリュルニク（塚原史、後藤美和子訳）	2500	2007
吉田書店	4905497196	憎むのでもなく、許すのでもなく――ユダヤ人一斉検挙の夜	ボリス・シリュルニク（林昌宏訳）	2300	2014
吉田書店	4905497264	心のレジリエンス――物語としての告白	ボリス・シリュルニク（林昌宏訳）	1500	2014
白水社 文庫クセジュ	4560510094	レジリエンス――こころの回復とはなにか	セルジュ・ティスロン（阿部又一郎訳）	1200	2016
法政大学出版局	4588007163	恥――社会関係の精神分析	セルジュ・ティスロン（大谷尚文、津島孝仁訳）	3200	2001
人文書院	4409180013	タンタンとエルジェの秘密	セルジュ・ティスロン（青山勝訳）	2800	2005
金原出版	4307150644	レジリアンス――現代精神医学の新しいパラダイム	加藤敏、八木剛平編集	3800	2009
金原出版	4307150668	レジリアンス――文化、創造	加藤敏編集	2800	2012
金原出版	4307150699	レジリアンス――症候学・脳科学・治療学	八木剛平、渡邊衡一郎編集	4500	2014
中山書店	4521740911	精神病理・精神療法の展開――二重らせんから三重らせんへ	加藤敏	3200	2015
角川選書	4047035416	〈わたし〉の哲学――オートポイエーシス入門	河本英夫	1600	2014
岩崎学術出版社	4753311033	精神分析と昇華――天才論から喪の作業へ	堀川聡司	3700	2016
みすず書房	4622076490	イトコたちの共和国――地中海社会の親族関係と女性の抑圧	ジェルメーヌ・ティヨン（宮治美江子訳）	4000	2012
法政大学出版局	58800848X	悪の記憶・善の誘惑――20世紀から何を学ぶか	ツヴェタン・トドロフ（大谷尚文訳）	5300	2006
法政大学出版局	4588009822	ジェルメーヌ・ティヨン――レジスタンス・強制収容所・アルジェリア戦争を生きて	ジェルメーヌ・ティヨン著、ツヴェタン・トドロフ編（小野潮訳）	4000	2012
講談社選書メチエ	4062583216	トラウマの発見	森茂起	1500	2005
岩崎学術出版社	4753307135	精神分析への最後の貢献――フェレンツィ後期著作集	フェレンツィS.（森茂起、大塚紳一郎、長野真奈訳）	3800	2007
星和書店	4791109432	メンタライゼーションでガイドする外傷的育ちの克服――〈心を見わたす心〉と〈自他境界の感覚〉をはぐくむアプローチ	崔炯仁	2300	2016
誠信書房	4414414295	愛着理論と精神分析	ピーター・フォナギー（遠藤利彦、北山修監訳）	3800	2008

今井書店外商部の営業活動について思うこと

古泉 淳夫（今井書店外商部）

はじめに

今井書店の外商活動は教科書供給を中心とした学校外商を柱として、官公庁、企業、個人宅を主な営業先としている。社の根本にある考え方は〝地域とともに〟である。

営業エリアは鳥取市から浜田市までの東西約250㎞、この間に6営業所を設けており山陰両県を概ねカバーしている。営業所は東から順に鳥取、倉吉、米子、松江、出雲、浜田にあり、営業スタッフは社員、パートタイマー等を含め60名ほどである。

出版不況が叫ばれて久しく、最近では取次の施策のなかに外商活動（外販）の文字が並び、この不況を打破する突破口の一つとしてよく取り上げられている。しかし私たちは、外商活動は地方書店の営業活動にはそもそも必須のものである、と考えている。人口が少なく人口密集地が多くないなかで、多店舗展開が難しく外商活動による営業の補完が必須であった。近年、出版物のマーケットが縮小していくのに伴い経営効率が求められるようになると地方書店でも店舗の統廃合を

行わざるをえなくなり、そのなかで外商活動は統廃合によって失われた地域読者サービスを補完するという役割も担うようになってきた。このような地方書店を取り巻く環境変化のなか、当社ではどのような外商展開を行っているか、私のつたない経験も含めて、その概要を説明したい。

業務の実際

当社の外商活動は次の3部門に大きく分けられる。第一が官公庁、企業、個人宅を中心とする一般外商、第二が小学校、中学校、高等学校、大学、図書館等を中心とする学校外商、第三が看護専門学校、医学看護系大学、総合病院、個人開業医等を中心とする医書外商である。前述した6営業所が、上記3部門を歴史的背景や地域の特色を生かしつつ配分し、営業活動を行っている。

営業活動の主としては、地域読者サービスの補完と並んで、市場の開拓も当然大切な業務である。市場を開拓していくうえでは顧客との信頼関係の強化を目指さなければならない。地域顧客との信頼関係が強くなり多くのファンを得るということは、結果としてネットに流れる注文を食い止める防波堤としての役割を果たすことでもある。顧客との信頼関係をしっかりしたものにしていくうえで私自身が経験し体験してきたことを次に述べたい。

私が最初に外商で担当したのは鳥取県庁(公官庁)であった。その後一般企業(職域中心)を回り学校外商を任されるようになったのは6年目のことである。当時、当社の鳥取地区の外商は学校外商において後発であり、厳しい状況におかれていた。そのために工夫したことはライバル店よりも長く滞在することと、店頭新刊を利用した「職員室図書巡回」であった。また業務が煩雑で

学校現場では若い職員が担当することが多かった教科書業務も徹底的にマスターし販売戦略に活用した。特に小中学校では教科書業務に関する質問が多く、教科書業務に精通することで教育現場にアドバンテージを持つことができた。滞在時間を増やす工夫として、一度定期雑誌配達を行った後で午後からは注文品を再度届けることも実行した。情報誌「これから出る本」の名入れ版を積極的に仕入れ、得意先にもれなく配布した。顧客に会うことができなくても定期品、注文品を届け、名入れ情報誌や出版社新刊案内を配布することで相手へ訪問したことがわかるようにした。一見非効率とも思える複数回訪問や営業先での無駄話が実はとても重要で、顧客の重要な情報が獲得でき、自分自身を覚えてもらうことにもつながる。

営業の成果はわかりやすい形で現れる。コミュニケーションができ注文が取れるようになると、その営業現場への訪問頻度が増える。さらに顧客の同僚等からの注文が増える。そして訪問頻度が増えていく。一方、コミュニケーションを欠き注文も無ければ、その営業現場へ行きづらくなる。注文が無いので訪問頻度が減少する。訪問頻度が減少すればさらにその営業現場から相手にされなくなる。

学校関係への営業活動のなかで、新学期の学生用のテキスト販売が重要な業務の一つとして挙げられる。顧客との信頼関係がより強固なものとなれば必然的に学生用テキストの注文が当社へ流れてくる。至急品の注文、入荷日時の確認等があれば、ただちに版元へ問い合わせ、その情報を学校現場へフィードバックすることにより、その信頼関係はより強くなり盤石なものとなる。携帯電話等の普及によりその作業は格段にやりやすくなった。

次に重要な業務として図書館への営業活動が挙げられる。新学期の繁忙期が一段落すると学

校図書館巡回が本格化する。新年度に取次から送品されてくる、児童書出版社の自主巡回見本セットを活用して巡回を行う。対象となる小中学校等を巡回するスケジュールを組み、そのスケジュールに沿って約半年間かけて自主巡回を行う。

一方、公共図書館については別途特殊な手立てを考える。ご存知かもしれないが鳥取県の中央図書館は地元書店の〝見計らい選書〟を購入の最優先策としてとらえている。県内の書店組合加盟店の意思表示により見計らい選定に参加することができる。見計らいを希望する書店は中央図書館の選書基準に沿い新刊書籍を仕入れ選定会に持ち込む。県の公費を地元に還元することで地方を活性化させるという〝地産地消〟の思いを汲み取ることができる。一方で書店側も地域企業として図書館活動へ積極的に参加し、図書館活動を下支えしていく。いわゆる〝鳥取方式〟と呼ばれるものである。このなかで当社は人文理工学の専門書を極力仕入れる努力を行ってきた。具体的には、通常の取次新刊配本では入手できないものを積極的に仕入れることを推進してきた。各出版社へも鳥取方式の思いを伝えてきたつもりである。大げさな言い方になるが、良書を地方でも支えていくという気概もあった。

この活動は前述した顧客との関係強化にも大いに役立った。顧客の情報を蓄積していくなかで顧客の趣味嗜好を知ることができる。するとその趣味嗜好に沿った専門性の高い新刊を外商営業現場で案内できるのである。また、地方書店ではなかなか入手することができない専門的な新刊を案内することにより顧客との関係はさらに強まる。地方であっても専門書を必要としているユーザーは必ず存在する。当時の学校現場の教員が、地方で手に入らない専門性の高い書籍をわざわざ都会に出向き定期的に購入していると耳にしたときに、これまでの取り組みの方向性が正

しかった、と確信したものである。

近年当社では、学校図書自主巡回をさらに発展させ「わくわく学校図書館フェア」と称して6つの営業所ごとに、会場での選書リスト作成活動を実施している。自主巡回見本セットの20箱前後ではマンネリ化してきている状況もあり、取次の協力も得て当社では学校図書館全点セットを借用し巡回させている。このなかでは図書館現場でさらに発展的に活用できるよう、「貸出トップ3」、「生徒児童に薦めたい本」等のオリジナル企画も立案し実施した。また高校図書館、公立図書館から新刊、実用書、専門書、教養書等の要望があり、この要望に応えるため今後は人文会、理学書、工学書協会からの協力も仰ぎ、より充実させた図書館フェアを展開していきたいと考えている。

主に学校外商を例として述べてきたが、地域読者へのサービス補完や市場開拓、顧客との関係強化といった点は医書外商、一般外商にも共通すると思う。

問題点、課題点

現在当社外商部の抱える問題点としては〝高齢化〟が挙げられる。第一に営業スタッフの高齢化である。地方になればなるほど人材の確保が難しく若手スタッフの育成が急務となっている。第二として、個人顧客の高齢化も進んでいる。優良顧客も定年退職を迎えれば取引額は減少していく。中堅の優良顧客も家庭を構え、子供の教育費等の観点から書籍購入額に制限がかかってくる。若い世代は読書離れが進み顧客として定着しない。そもそも人口減少に伴い学校教員数そのものが減っている。ネットによる取引や、ポイント付与等により外商顧客から離れつつあるよう

にも感じる。また、学校現場においても個人情報保護の観点から職員室の出入りが制限され、自由に顧客に会うことのできない環境にもなってきている。私が以前行っていた職員室図書巡回も勤務中の物販行為とみなされ、現在は禁止されてしまっている。様々な要因から個人売上(私費売上)の減少に歯止めがかからない。少し前の人文系ベストセラー、みすず書房『21世紀の資本』や、本年話題となっている河出書房新社『サピエンス全史(上)(下)』も外商販売部数としては思うように伸びていない。これらの点から「若手スタッフ確保」と同時に「専門書を見る目を養う」ということも引き継ぐべき重要な課題点と言える。

鳥取県の人口は60万人を割り、島根県の人口も70万人を割り込んだ。山陰両県を合わせて東西300kmという範囲に人口約125万人の市場である。両県合わせても人口レベルはさいたま市並み、一方で距離は東京から名古屋までの距離に相当するわけである。前述した人材確保の難しさは、広範囲に営業拠点が存在し人事交流もままならないということも要因となっている。ただ、地理的要因に愚痴を言っても仕方がない。〝負の要因〟があるならその逆もあるはずである。条件が厳しくても、〝町の書店の外商員として地方文化の発信拠点になる〟という矜持を持ち続け頑張るしかない。そして〝地域とともに〟という理念のなかにおいて、外商にはまだまだ残された可能性がきっとあると信じている。

筆者近影

古泉 淳夫(こいずみ あつお)

石川県西田幾多郎記念哲学館の歩み

中嶋　優太（石川県西田幾多郎記念哲学館）

石川県西田幾多郎記念哲学館は、日本を代表する哲学者西田幾多郎（一八七〇－一九四五年）の出生の地、石川県かほく市が運営する哲学の博物館である（写真1）。西田幾多郎の直筆資料や遺品を数多く所蔵し、人物記念館としての展示を行いつつ、他方で西田哲学だけでなく、広く哲学一般の普及を使命として市民向けの講座など哲学イベントを数多く手掛けている。幾多郎の思想をイメージした安藤忠雄設計の建築も魅力の一つで、建築を目当てにカメラを掲げて来館する観光客も多い。

幾多郎は一九四五年（昭和二〇年）、終戦の直前に亡くなったが、程なくして、かほく市では幾多郎を顕彰する活動が始められた。その活動の中で、西田幾多郎の人物を記念した記念館が作られ、さらにそれが発展して、西田幾多郎の人格を顕彰するのみならず、西田哲学および哲学一般の普及を目指した現在の哲学館が形成されてきた。ここでは、その歩みを振り返るとともに、現在の哲学館の試みを紹介する。当館は図書館ではないが、文化を残し、活かす施設としては、共通した部分もある。当館の試行錯誤の歩みが何かの参考になればと思う。

一　西田幾多郎を顕彰する――頌徳会の発足

現在の哲学館へとつながる動きはどこまでさかのぼれるのだろうか。そう思って、所蔵する幾多郎の資料を調べてみると面白い資料があった。それは幾多郎の直筆論文原稿の一つ「場所の自己限定としての意識作用」であ

写真１　石川県西田幾多郎記念哲学館の外観

る（写真２）。この論文は、田辺元の批判に刺激されて書かれたもので、西田・田辺間の日本哲学史上最大の哲学論争を理解するうえでも興味深いが、今、注目したいのは内容ではなく、表面である。この原稿は、原稿用紙を改めて綴じ直し、表紙がつけられているが、その表紙には「宇ノ気村新化会」という文字が、裏には「昭和十二年」に寄贈とある。新化会は、幾多郎の母校である宇ノ気小学校（旧称：新化小学校）を中心に組織された集まりである。「昭和十二年」（一九三七年）だから、幾多郎は存命中で、まだまだ精力的に論文を執筆している。幾多郎は、生前から、郷里から請われて論文原稿を寄贈していたことになる。幾多郎の書いたものを大切にしたいという思いが、早い時期から郷里で高まっていたということの証拠である。

幾多郎が亡くなり、程なくして、一九四七年（昭和二二年）に、西田幾多郎博士頌徳会が発足している。一四〇余名がその発起人として名を連ねたが、そこには地元の行政、教育の関係者のほか、四高以来の友人、鈴木大拙や、京都大学での同僚および弟子たち（朝永三十郎、植田寿蔵、務台理作、西谷啓治、高坂正顕）の名前が見える。また、

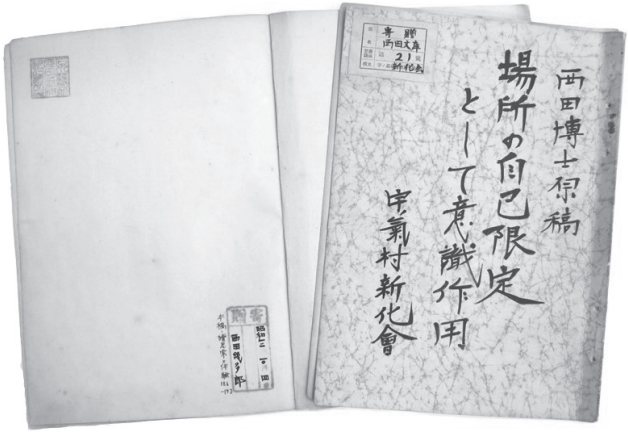


写真２　直筆原稿「場所の自己限定としての意識作用」

幾多郎と関係があり、とりわけ地元石川県にゆかりのある人々としては、暁烏敏（石川県白山市明達寺）や中田邦造（石川県立図書館および東京都立日比谷図書館の館長を歴任）などの名も見える。

頌徳会が発足した一九四七年には、幾多郎の命日である寸心忌（寸心は幾多郎の居士号）にちなんだ講演会も始まっている。第一回の登壇者は、久松真一、西谷啓治、暁烏敏、高坂正顕であった。その後、幾多郎の直弟子などを中心とした講師で講演会が行われ、今日でも、西田哲学および哲学、宗教学の分野で日本を代表する研究者が登壇する講演会として続いている。

頌徳会の発起人や寸心忌記念講演会の講師陣に、幾多郎の弟子を中心として、著名な研究者が名を連ねていることからもわかるとおり、当地での幾多郎の顕彰事業には幾多郎と学術的な交流があった研究者たちの協力があり、はじめから、アカデミックな性格を持っていた。それは今も変わらない性格であり、毎年、多くの先生方の協力を得て、市民が本物の学問に触れられる機会を提供している。

二　旧西田記念館の設立――遺稿・遺品の保存と哲学講座

頌徳会が発足してからおよそ二〇年後、一九六八年（昭和四三年）には、当地に、展示室、図書室、書庫などを備えた旧西田記念館が建てられている（写真3）。この記念館の設立の趣旨について、当時の宇ノ気町長大和七郎は「先生が逝かれてここに二十三年、その遺稿遺愛品は次第に散逸のおそれもあります。よって先生出生の本町に記念館を建設してそれらを保存するとともに、その著書をも蔵して、一つには西田哲学研鑽の場とし、一つには青年諸君に先生の人格を偲んでいただくため」の事業であると述べている。幾多郎資料を散逸から守り、後世に残す活動が当地で本格化したことを物語る出来事である。

一九七四年（昭和四九年）には京都から幾多郎の書斎「骨清窟」も記念館の隣に移築されている。この書斎は三井財閥の創始者である三井八郎衛門高棟が幾多郎のために京都に新築した西田邸の一部である。住むもののいなくなった西田邸が取り壊されることとなったために、せめて、西田の思索が紡がれた書斎だけでも残したいということで当地へ運んだのである。二〇〇三年（平成一五年）に国の登録有形文化財として登録され、二〇一〇年（平成二二年）には、文化財的な時代考証と修復を経て、哲学館の敷地に再び移築され今日に至っている。

現在、書斎はガラス越しに見学ができるように整備されて、西田が執筆をした机と椅子、弟子たちから送られた絵画を見ることができる。本棚には、幾多郎の蔵書がおよそ一八〇〇冊配架されている。これは、京都大学文学部図書館に寄贈された西田文庫と並ぶ規模で、哲学の専門書だけでなく、文学関連書や漢籍などが多く、幾多郎の幅広い読書生活を知ることができる。

また、大和町長の言葉にもあるとおり、この記念館は、人物資料を残し、西田幾多郎の人格を偲ぶだけでなく、西田哲学の研鑽の場となることも期待されていた。一般の市民を対象とした哲学講座の開講は、頌徳会でも重要課題として掲げられていたが、その思いが実現したのは、一九八一年（昭和五六年）のことである。この年に始まった「夏期哲学講座」（現在の名称）では、全国から募集した

写真３　旧西田記念館

受講生が、数日にわたって、講演会、ゼミナール形式の研究会を組み合わせたプログラムに取り組む。第一回は、新聞各社が「全国の哲学青年集合！」と報道したこともあり、定員四〇名に対して、最終的に四〇〇名以上の申込があった。研究者のアウトリーチ活動が重視され、一般市民向けの哲学講座や講演会も珍しくなくなっている昨今とは異なり、当時は、一般の市民が参加できる哲学講座は少なかった。申込の多さは、市民たちが如何に哲学の場を渇望していたかを物語っている。ここに始まった講座事業が発端となり、単に人物を顕彰し、資料を守るだけでなく、哲学イベントを開催し、市民に哲学をする場を開くという今日の哲学館の性格が形作られてきた。

三　石川県西田幾多郎記念哲学館の開館――哲学の普及

こうした前史を経て、二〇〇二年（平成一四年）に石川県西田幾多郎記念哲学館が開館した。この博物館は、石川県が建物を建設し、運営をかほく市（開館当時は宇ノ気町）が担っている。哲学館がそれまでの記念館と大きく異なっているのは、西田幾多郎の人物を顕彰し、西田哲

学を学ぶ場を提供するだけでなく、「哲学」そのものの普及を目的として掲げている点にある。哲学館の条例には「郷土が生んだ哲学者西田幾多郎の遺徳を顕彰するとともに、哲学に関する情報を集積し、これを発信し、もって哲学の普及及び啓発を図るため、市民の精神修養の場として、哲学館を設置する」とある。

西田幾多郎記念哲学館は西田幾多郎の人物記念館(Nishida Kitaro Museum)であると同時に、哲学の博物館(Museum of Philosophy)の役割を果たしている。ちょうど、科学館が科学の魅力を伝え、科学的なものの考え方を学ぶ場を提供するように、哲学の楽しさを伝え、哲学的にものを考える機会を提供する。思想家の人物記念館は数多くあるが、哲学そのものの普及を目指した博物館は全国的にも珍しい。

哲学の本質は自由な批判的精神にあるから、あらかじめ西田哲学ありき、という形で答えが用意されていたのでは、面白くない。その意味でも、当館が講座などを通して、西田哲学に限らず、さまざまなタイプの哲学に市民が触れる場を提供していることは好ましいことである。何を感じ、何を考えるかは、一人ひとりの受講生が自由に決める。さまざまな哲学の中で、彼らが西田哲学をどう受け取るかはわからないが、いずれにしても、西田哲学を単に残すだけでなく、活かすためには、自由に思考する哲学の場所が必要だろう。人物の顕彰だけでなく、哲学の普及を目的の一つに加えたことによって、哲学館は、幾多郎に関心のない人にも開かれた哲学する場所になった。以下では、二〇一六年度(平成二八年度)の実施状況を例にして、当館の主な哲学イベントを紹介したい。

■第七二回寸心忌記念講演会。東京大学名誉教授の島薗進氏にお越しいただき、「近代日本知識人の死生観」をテーマにお話いただいた。

■第三六回夏期哲学講座。年齢も二〇代から八〇代までの多様な参加者が集まり、合宿所では夜を徹して議論しあっている姿が見られた。主な講演は、「哲学する場所をつくる——哲学塾について」(中島義道氏／元電気通信大学教授)、「対話する西田哲学——対話の〈他者〉とは誰か」(大橋良介氏／哲学館名誉館長、日独文化研究所所長)。

■西田幾多郎哲学講座。一九九〇年に始められた年間一〇回の哲学講座。西田幾多郎や京都学派の思想家たち

だけでなく、哲学全般にかかわるテーマについて教養を深めることを目的に開催している。哲学だけでなく、宗教、美学など関連する諸分野のテーマも扱っている。昨年度の主な講演は、没後百年を迎えた漱石と幾多郎のニアミスについて推理した「ニアミスする明治の精神――西田幾多郎と夏目漱石」（小林敏明氏／ライプツィヒ大学教授）や、哲学とはどのような営みなのかを考え直す「ギリシアにおける哲学者の誕生」（納富信留氏／東京大学教授）など。

■寸心読書会。一九四七年（昭和二二年）に始まった、西田幾多郎の著作やエッセイ、関連する思想家の文章を読む読書会。昨年度は『善の研究』の第四編「宗教」と第一編「純粋経験」を一二回かけて、一章ずつ読んだ。講師は、当館の副館長で立教大学准教授の大熊玄氏。

■ゆかりの地事業。昨年度は、「西田幾多郎に出会う」と題として、山口県でもイベントを行った。山口県と幾多郎のかかわりはあまり知られていないが、幾多郎は、二〇代の末に、校内の内紛に巻き込まれて四高（石川県）講師の職を免じられたあと、二年間、山口高校に勤めている。その山口時代の西田の下宿が現在も残されており、その場所で、山口大学教授、佐野之人氏を中心に読書会が行われている。今回はこの山口西田読書会や山口大学哲学研究会とともに主催したイベントである。山口県下関市出身で、西田哲学会会長の秋富克哉氏をお招きして「形なきものの形――西田哲学が問うたもの」と題した講演会も行った。県外に出てのイベントは、かほく市の哲学館をアピールする意味もあるが、それ以上に、幾多郎とのかかわりがあまり知られていない地方で、幾多郎や哲学に関心が集まるきっかけを作ることができたことが大きな収穫だった。

四　哲学をもっと身近に――入門講座と哲学カフェ

近年、哲学館では、哲学の裾野を広げるために、気軽に哲学を楽しんでもらうイベントも企画してきた。できる限り哲学用語を使わずに、身近なテーマについて考えてもらうきっかけを提供する哲学入門講座（昨年度は「お化け屋敷」と「愛の意味」がテーマになった）や、日常的なテーマについて参加者同士が語り合い、考える哲学カフェなどである。「哲学の普及」という目的のためには、

はじめは哲学に興味がなかったという人にこそ哲学館に足を運んでいただき、哲学し、考えることの楽しさに触れてもらいたいという思いもある。哲学は難しい、という一般的なイメージをどう覆すかが課題である。

ここでは、哲学カフェを組み込んで、身近に考える＝哲学するために仕掛けたイベントを紹介したい。

■本の展示会「哲学する本棚『食』」二〇一七年二月一日～三月一二日（写真4）。このイベントは、書店や図書館でよく行われている選書に着想を得たものである。哲学館内の「ホワイエ」と呼ばれる安藤建築らしい吹き抜けの空間に「食」をテーマにした絵本や子供向けの哲学書、小説、哲学の古典などを展示した。中央には、リラックスした雰囲気を演出するために、北陸の冬らしいコタツを設置して読書空間を作り、来館者は展示されている本を自由に手にとり、コタツに入りながら読書を楽しむことができる。もともと、哲学館には図書館が設置されており、そこには、西田幾多郎の研究書や戦前の書籍など、西田哲学研究・日本哲学研究に必要な書籍だけでなく、初めて哲学に触れる市民のための入り口となるように、哲学の入門書や、絵本、子供向けの哲学書なども充実している。このイベントは、この図書室の本を活用したものだった。期間中には、「好き嫌いはなぜいけないの？」、「一人で食事をするのはよくないこと？」というテーマで哲学カフェも行い、楽しく考える＝哲学する体験を提供した。

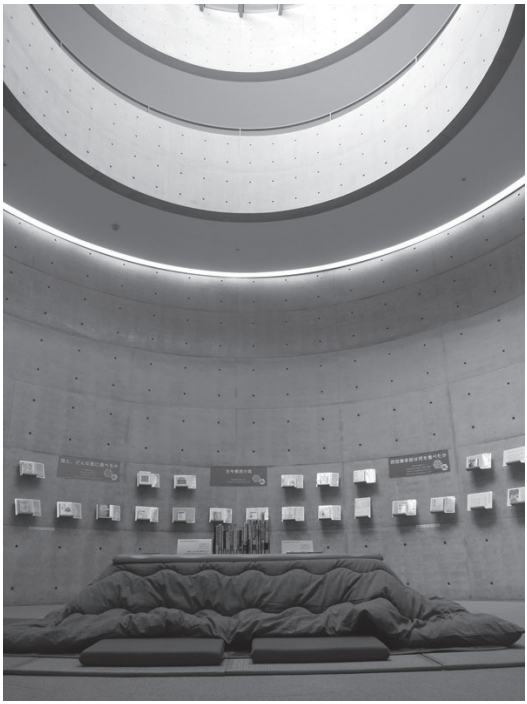


写真4　期間限定の読書空間に設置されたコタツ

安藤建築と「コタツ」という奇妙な組み合わせが受けたのか新聞やテレビなど地元メディアにも取り上げられた。そのおかげか、普段、哲学館ではあまり目にすることがない家族連れの来館者らが、ゆったりとくつろぐ姿が見られたことは今後の励みになった。

五　哲学する子供たち

哲学の裾野を広げるという意味では、子供たちを対象とした事業も重要である。彼らは多くの場合、哲学館で初めて哲学に触れることになるから、ここで哲学を魅力的に感じるかどうかは重要である。二〇〇九年からは、合併によって新しく生まれたかほく市の中で、市内の小中学校の子供たちが共通に学習する偉人教育の題材として西田幾多郎を取り上げる事業が行われ、哲学館を見学して、西田幾多郎の人となりについて学んでいる。そのほか、県内の高校からも、石川県らしい学習のプログラムとして、西田幾多郎の哲学を学びたいと団体で来館されての見学・講義や、高校へ出向いての授業を依頼されることもある。

近年は、単に西田幾多郎の人生について紹介をするだけでなく、幾多郎の哲学の内容を学ぶ、テキストを読むなど、子供たち自身が哲学をする機会を作ってほしいという声が聞かれるようにもなった。一昔前までは「哲学」には、大人のもの、それも相当の人生経験を積んだ後で学ぶものというイメージが強かったが、今では、子供と哲学の組み合わせは珍しくない。確かに、「哲学」をプラトンやカントなど先哲の言葉を学ぶ「教養」として見るならば、それに触れるためには最低限の哲学用語と哲学史についての知識が必要となるので子供には難しい。けれども、「哲学」を、自分の頭で批判的に考える活動だと見るならば、難しい哲学用語など使わなくても、誰でも、ふとした瞬間の、気づきや疑問から哲学を始めることができる。素直な問いを持つことができるという点では、むしろ、子供たちのほうが哲学に向いているのかもしれない。

全国的に見ても、小学校・中学校を中心に、Ｐ４Ｃ(Philosophy for Children)などとよばれる、対話の手法を用いた哲学の授業が試みられるなど、子供に哲学の体験を与える動きが広がっている。昨年度は哲学館でも、偉人

写真５　「中学生のための哲学カフェ」の様子

教育を通じて哲学になじんでいる市内の中学生に考える体験をしてもらおうと「中学生のための哲学カフェ」を開催した(写真５)。講師は、開智中学・高等学校などで哲学対話の授業を担当されている土屋陽介氏。こうした哲学対話では、最初に、考えるきっかけとして絵本などを提示することが多いが、今回は、大月書店の「考える絵本」シリーズ第六巻『子ども・大人』を用い、対話を行った。中学生たちは、自分たちで「どこから大人？子供？」を考える問いに決め、互いに聞き合いながら、考えを深めていた。子供たち自身でも哲学することができるということが見えたイベントだった。

六　哲学館の歩みと現状

今回は、かほく市での幾多郎の顕彰事業の始まりから、哲学館の歩みを振り返るとともに、現在、哲学館が行っている哲学普及のための事業を紹介した。ご紹介したとおり、哲学普及事業と一言でいっても、伝統のある夏期哲学講座など、本格的な講座から、哲学の裾野を広げるための事業、子供向けの事業までさまざまである。時代

によって、哲学を取り巻く状況も変化する。それに対応して、哲学普及事業は試行錯誤を続けていくことになるだろう。

それだけでなく、哲学館では、人物記念館としての活動、つまり、資料の収集と整理・研究、そして展示の活動も行っている。旧西田記念館から資料を引き継ぎ、開館した二〇〇二年の時点で約九〇〇点だった所蔵資料は、その後の、寄贈と購入により、二倍の約一八〇〇百点にまで増えた。二〇一五年には、展示室のリニューアルを行い、展示スペースの増設により多くの資料を常設展の中で紹介できるようにつとめるとともに、企画展を行えるスペースも設置した。旧西田記念館時代からの地道な活動によって収集した所蔵品の多さは、本博物館の特色でもある。今後は、いっそう収集活動に力を入れ、資料の散逸を防ぐとともに、収集した資料を整理・研究して、展示や図録の作成などの形で社会に還元していくことが課題となる。二〇一六年からは、石川県立看護大学の浅見洋氏が当館の館長に就任した。徹底した資料調査で、幾多郎の残した俳句や、幾多郎の姪で、当時としては珍しい女性の哲学研究者、高橋ふみを見出すなど、哲学者の資料調査のパイオニア的存在でもある浅見氏を迎えることで、哲学館の資料研究センターとしての側面も強化されている。

『新版西田幾多郎全集』(岩波書店)の出版(二〇〇二年から二〇〇九年)以降に新たに発見された資料も少なくない。二〇一六年には、五〇冊にも及ぶ幾多郎直筆ノートが発見された。これほど大量の未公開資料が発見されたことは、哲学館の歴史の中でも初めてで、当館の資料研究事業は新たな局面を迎えている。

哲学館は、哲学普及のための事業においても、西田幾多郎の人物資料の収集・研究の事業においても、これまでの歴史と伝統を大切にしつつ、今何ができるのか、何をすべきなのか、試行錯誤の日々である。

中嶋 優太(なかじま ゆうた)
一九八四年生まれ。京都大学大学院文学研究科日本哲学史専攻博士課程単位取得退学。二〇一五年より、石川県西田幾多郎記念哲学館研究員。共著『「善の研究」の百年——世界へ／世界から』(京都大学学術出版会、二〇一一年)。

『トーマス・マン日記』全十巻について

伊藤 暢章（元紀伊國屋書店出版部長）

紀伊國屋書店出版部が一九八五年以来翻訳出版してきた『トーマス・マン日記』全十巻が、二〇一六年三月に最終巻が出版されてようやく完結し、日本翻訳家協会による「第五十二回日本翻訳出版文化賞」を受賞したことはご存知の方も多いであろう。

私は編集者ではない。ただ、刊行が三十年以上にわたったため、代々五人の担当編集者は最後の一人を残してみな退職しており、最初から最後まで何らかの形でこの日記の出版にかかわってきたのは私だけになっている。

トーマス・マンは書き続けていた日記の大部分を少なくとも二度にわたって廃棄、焼却していた。しかし、没後に「文学的価値なし、死後二十年は開けてはならない」などと記して封印された日記の包みが四個残されていた。この包みは、チューリヒ工科大学のトーマス・マン・アーカイブに保管されていたが、一九七五年八月に開封された。出てきたのは、一九三三年三月十五日から五五年七月二十九日まで、すなわち亡命を余儀なくされてから死去直前までの一貫した日記と、どういうわけか破棄されずに残された一九一八年九月十一日から二一年十二月一日までの部分である。日記は全部で三十二冊、余白なしにびっしりと書き込まれていて、五一一八ページに及んでいた。トーマス・マンの全著作の版元であったS・フィッシャー社は、ただちにこの日記全文を公刊することを発表した。これは文学界、出版業界にとっては「事件」であり、業界誌のみならず一般紙の文芸欄、ニュース週刊誌などでも大々的に報じられた。

その当時私は紀伊國屋書店洋書仕入部の選書を担当する部署にいた。つまり、世界各国の出版情報を集め、仕入れるべきものを選び、毎月の新刊洋書案内を作成し、重要なものはチラシやパンフレットを作って配布するなどの仕事をしていた。S・フィッシャー社とは直接取引があったから定期的に新刊案内が送られてきていたが、この『トーマス・マン日記』についてはとくに詳細な出版計画を記したパンフレットが届いた。これをもとに宣伝物を作成、配布したのは言うまでもないが、同時に出版部に十分に邦訳、出版の価値あるものとして報告した。

しかし、私はわが社がその翻訳出版権を取得するとはまったく考えていなかった。すでに新潮社が『トーマス・マン全集』(全十二巻+別巻、初版一九七一－七二年)を出しており、これには長編、短編小説はもとより戯曲、詩、評論、書簡までが収められていた。当然ながら『日記』はこの全集を補完するものとして新潮社が版権を取得するものと思っていた。

どういういきさつでわが社がそれを獲得できたのかについては、私はまったく関知していない。ともあれ、出版部長から版権獲得の知らせと同時に翻訳者の選定につ

『トーマス・マン日記』全十巻
森川俊夫ほか訳
四六判／函入り
本体価格 各巻8000円～17000円

いて相談を受けた。私はただちに青木順三さん(当時一橋大学教授)に連絡を取ってこの件を相談した。青木さんはすでに紀伊國屋書店出版部からエーリヒ・ヘラーの『廃嫡者の精神』(一九六九年)を出されていたし、東京外国語大学ドイツ語科の同級生でもあった。

『トーマス・マン日記』の訳者については、青木さんは同じ一橋大学の森川俊夫教授を、トーマス・マン研究の第一人者として、強く推薦された。出版部では別途に東京大学の教授であった浜川祥枝先生に接触し、結局、最年長の浜川先生を訳者代表とし、森川先生と岩田行一先生(東京都立大学教授)が加わって、このお三方で訳業が開始されることになった。しかし、初巻以外はすべて森川先生が代表者となり、その中心となって進められた。森川先生の単独訳は三巻あるが、共訳の場合もその訳文を森川先生が厳密に校閲するばかりでなく、訳語や表記の統一をもはかっておられる。なお、共訳者には横塚祥隆(成城大学教授)、佐藤正樹(広島大学教授)、田中暁(広島大学教授)、洲崎恵三(筑波大学名誉教授)、前田良三(立教大学教授)などの諸先生のほかに私も名を連ねている。

『日記　1933-1934』の原書は一九七七年に、訳書は一九八五年末に出版された。以降は、『1935-1936』(一九七八年、訳書一九八八年八月)、『1918-1921』(一九七九年、訳書二〇一六年三月)、『1937-1939』(一九八一年、訳書二〇〇〇年二月)、『1940-1943』(一九八二年、訳書一九九五年十一月)、『1944-1946』(一九八六年、訳書二〇〇二年五月)、『1946-1948』(一九八九年、訳書二〇〇三年十二月)、『1949-1950』(一九九一年、訳書二〇〇四年十月)、『1951-1952』(一九九三年、訳書二〇〇八年八月)、『1953-1955』(一九九五年、訳書二〇一四年五月)となっている。

原書は完結まで十八年、訳書は三十一年という年月を要している。原書の編集者が告白しているように、まず手書きの文章の判読に手間がかかった。初巻の巻頭に自筆の原文が写真版で示されているが、ひどく癖のある旧ドイツ語筆記体で読み難い(トーマス・マンは自筆原稿をそのまま出版社に提出することはなく、ミュンヒェン在住時には必ず専門業者にタイプライターで浄書させ、のちにはカトヤ夫人などがタイピングして、それをチェックした上で送付していた)。人名や地名などは、おそらく耳で聞いたまま、いい加減

に綴られている。文章そのものも丁寧に記述された部分と粗雑に書きなぐった部分とが混在しており、なかには構文がおかしく、意味不明な個所もある。原書は日記全体をそのまま復元することを原則としているから、変な個所には注釈をつけて済ませている。人名や事項の注記も詳細をきわめた。また、第三巻目以降は、それまで知られておらず全集に収録されていなかったトーマス・マンのさまざまな文書が、この日記を手掛かりにして探し出され、各巻の巻末に「補遺」として収録された。それらにより当初八巻の予定であったものが十巻にふくれあがった。

訳書の遅れは、何よりもその量の膨大さであった。訳書では最小の巻で七三六ページ、最大で一二八〇ページ、その他はいずれも一〇〇〇ページ前後である。すべてが初訳であり、原書には前述のような事情があって翻訳はきわめて困難であった。共訳予定者の中途での辞退、パソコンの不具合で原稿データが失われたり、森川先生ご自身の病気などもあった。

私が出版部長を命じられたとき『トーマス・マン日記』はまだ最初の二巻しか出ていなかった。ドイツ語は苦手という編集者にバックアップを要請されて、私が実務にかかわるのは第三巻目以降である。まず原稿または初校の段階で原文と照合して遺漏や疑問点を指摘、数回にわたる校正に目を通し、索引作成をも手伝った。このような仕事は訳者の負担を少しでも軽減し、刊行を早めるためであった。また同時に、あの別宮貞徳先生からわが出版部の英訳本の誤訳が槍玉に挙げられたこともあって、翻訳書にかかわる編集者の役割が問い直されていた。すべてを訳者まかせであってはならず、編集者は知見の許すかぎりこれに関与しなければならないと認識されるようになっていた。このいわば編集者の裏方としての仕事は私の退職後も続いた。

年代の一番早い『1918-1921』は、第一次世界大戦の末期で講和交渉が進行中、トーマス・マンは『非政治的人間の考察』を出版し、『主人と犬』と『おさな児の歌』を書きあげたあと、中断していた『魔の山』の再執筆にとりかかる。帝政崩壊後の混乱したミュンヒェンでの出来事、市街戦、ユダヤ人文士たちによる評議会（レーテ）の設立とその崩壊、共産主義者による人質だった貴族たちの虐殺などを克明に記録し、講和の成り行きに

一喜一憂する。家族では末っ子の三男ミヒァエルが誕生した。

亡命後の日記は、スイスのキュスナハトにほぼ五年間定住、その後アメリカに移住して十四年間を過ごしたのち、ふたたびスイスに戻って死去するまでの出来事を記している。

ミュンヒェンを出てからちょうど一年後の一九三四年二月十一日の日記に、それまでの身辺に起きたことを記したあとでこう書いている。「心的な興奮ならびに住み慣れた生活基盤の喪失によって惹き起された病気の日々にアローザでふたたび始めたこの日記の記録は、私にとってはあれ以来一つの慰めであり救いだったのであり、私はかならずやこれを書き続けるだろう。（中略）それは、思い出にふけったり読み返したりするためというよりはむしろ、自分の行動の責任を明らかにし、それを総括し、意識化し、責任をもって監視していくという意味においてである……」

これがその後の日記の基調となっている。その期間に成立した『ヨゼフとその兄弟たち』、『ヴァイマルのロッテ』、『ファウストゥス博士』などの創作過程が辿れるばかりでなく、激動する世界情勢のなかでの身辺の変化、親密な家族関係、当代一流の作家たち（これは枚挙にいとまがない）、音楽家（指揮者ブルーノ・ヴァルターなど）や芸術家、映画人（チャプリンなど）、科学者（アインシュタインなど）、政治家（たとえばローズヴェルト大統領夫妻）などとの多彩な交友、交際関係が記録され、ヒトラー政権には断固として反対する行動（BBC放送「ドイツの聴取者諸君！」や数々の講演活動）を起こしながらも真摯にドイツ文化を憂慮する心情を吐露していた。

第二次世界大戦終了後、ナチス政権下のドイツでは禁書となっていたトーマス・マンの著書が、やはり亡命先から戻って出版活動を再開したS・フィッシャーから次々と出版された。しかし、このノーベル文学賞作家（一九二九年受賞）の偉大さは認めるにしても、そのことを口にすることははばかられていた。ナチの同調者、同調しないまでも国内亡命者として無言を貫いた文人やジャーナリストがまだ多くいたし、国民と苦難を共にしなかった亡命作家として、一般にもいささか冷淡に見られていたのである。

それが一変してトーマス・マン・ルネッサンスと称さ

れる現象が起きたのは、この『日記』がきっかけであったと言ってもよいだろう。二〇一〇年に『ブデンブローク家の人々』出版百年を記念してさまざまなキャンペーンが行われたが、なかでもARD（ドイツ公共放送連盟）の数時間に及ぶドキュメンタリー・ドラマ『マン家の人々』三部作が人気を集めた。このドキュメンタリーによってトーマス・マンの亡命時代をふくめた全体像が一般にも広く知られるようになったのだが、その大部分がこの『日記』に依拠していたことは言うまでもない。これを機にトーマス・マンの作品だけでなく、兄ハインリヒ、長男クラウスの小説、妻カトヤの回想録などが飛ぶように売れたという。ドイツ人ははじめてトーマス・マンを誇るべき国民的作家と見なすようになったと、当時の週刊誌は伝えている。

日本ではそのようなことは起こらなかった。昭和時代は戦前戦後を通じて外国文学がよく読まれていた。ドイツ文学にかぎって言えば、トーマス・マン、ヘッセ、カフカ、カロッサ、詩人のリルケやゲオルゲ、戯曲のハウプトマンやブレヒトなど同時代の作家のほとんど全作品が翻訳、出版されて広く親しまれていたし、日本の作家たちにも大きな影響を与えた。平成のいまは見る影もない。大書店の外国文学の棚は大幅に縮小され、ドイツ文学にいたってはごく僅かである。

『トーマス・マン日記』も例外ではなかった。知識人には高く評価されているものの、一般の人々の関心は薄れてきたようである。年を経るにつれて販売部数は減少し、それにつれて単価は高くなったのではないか、そう考えるといささか悲しい。

ただ、この『日記』完結を機に大学図書館や公共図書館から新たに揃いの注文が増えていることをうかがって、愁眉を開いている。ナショナリズムやポピュリズムのはびこる今だからこそぜひ手にとってほしい精神の記録だからである。

伊藤　暢章（いとう　のぶあき）

人文会会員名簿

〒113-0033　文京区本郷5-32-21　みすず書房内

2017年4月現在

社　名	担当者	〒	住　所	電　話	FAX
大　月　書　店	佐藤　信治	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石　　修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	志田　則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子　　智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3122
勁　草　書　房	西野　浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春　秋　社	吉岡　　聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶　文　社	片桐　幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠　信　書　房	新保　卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青　土　社	森　　卓巳	101-0064	千代田区猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創　元　社	水口　大介	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑　摩　書　房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元　博樹	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日　本　評　論　社	五月女　公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白　水　社	岩野　忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社（休会中）		101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉　哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田﨑　洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	須藤　　圭	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未　來　社	水谷　幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-5596
吉川弘文館	片山　伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事	田﨑洋幸
会計幹事	平石　修
書記幹事	新保卓夫
	《◎委員長（幹事）　○副委員長》
販売・企画委員会	◎朝倉哲哉　○片桐幹夫・水口大介・森　卓巳・志田則幸・水谷幹夫
調査・研修委員会	◎橋元博樹　○片山伸治・西野浩文・藤井若菜彦・五月女　公
広報委員会	◎岩野忠昭　○乙子　智・須藤　圭・吉岡　聡・佐藤信治

人文会ホームページ　http://www.jinbunkai.com/

（各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ）

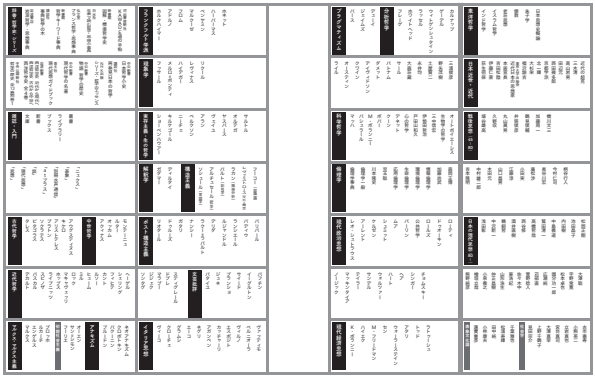
『人文書販売の手引き［第2版］』刊行のお知らせ

『人文書販売の手引き』とは、人文会が編集・発行する書店員様向け人文書販売マニュアルです。このたび、データを大幅に更新した第２版が完成しました。より使いやすくなった「人文書販売の手引き」を店頭活性化にぜひご活用ください。

（前略）しかしながら昨今、状況は一変しました。中堅やベテランといえるキャリアの方から教えを請われることが多くなり、このことは当然、若手の書店員の方々にも影響してしまいます。なので、このような状況を打破するためにも、マニュアルの作成が必要であると判断しました。

「人文書販売の手引き」には、役立つヒントは載っていますが答えは載っていません。あくまで骨組みの提示であり、肉付けするのはそれぞれのご担当者です。大変恐縮ですが、試行錯誤して頂きながら、個々のお店に合った答えを導き出して頂ければ幸いです。

（「『人文書販売の手引き』第2版刊行に際して」より）



『人文書販売の手引き』第２版は、人文会ウェブサイトよりダウンロードできますので、是非ご利用、ご活用ください。

http://www.jinbunkai.com/

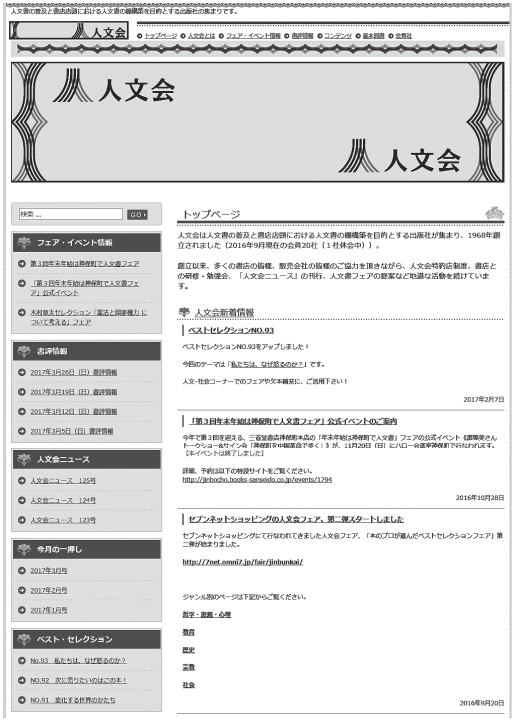
『人文書販売の手引き［第2版］』
編集・発行：人文会
B5判並製84頁　2015年10月1日発行
ISBN978-4-915735-07-3（非売品）

人文会ウェブサイト、リニューアルのご案内

「人文会ニュース」のデザイン変更に伴い、ウェブサイトもデザインを一新いたしました。「人文会ニュース」との統一感を出すだけでなく、メニューなどのインターフェースも変更し、これまで以上に人文会の各種情報にアクセスしやすくしました。

人文会が主催する、あるいは協力しているイベントやフェアの情報は「フェア・イベント情報」に随時掲載いたします。四大全国紙の読書欄に掲載された会員社の出版物は「書評情報」にまとめてあります。「今月の一押し」「ベスト・セレクション」はPDFファイルをダウンロードできますので、店頭の品揃えにお役立てください。

「人文会ニュース」の各コンテンツは「人文会ニュース」からPDFファイルで閲覧が可能です。



URL　http://www.jinbunkai.com/

目録のご案内（5月18日発行予定）

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行　A5判・平均245頁　頒価本体（各）286円

◆哲学・思想図書総目録2017－2018年版

約2,200点（140社）収載。

〔掲載分野〕哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN 978-4-915268-37-3

◆心理図書総目録2017－2018年版

約3,200点（120社）収載。

〔掲載分野〕心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心理/精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN 978-4-915268-38-0

◆社会図書総目録2017－2018年版

約2,800点（130社）収載。

〔掲載分野〕社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉教育/社会心理/社会問題/文化文明論/文化人類学 ほか

ISBN 978-4-915268-39-7

＊ご注文は書店にお願いいたします。
書影は2016-2017年版のものです。

●人文会　〒113-0033　東京都文京区本郷5-32-21（みすず書房内）
●人文図書目録刊行会　〒162-8710　東京都新宿区東五軒町6-24（トーハンビル内）
TEL　03-3266-9521（事務局）

待望の書簡集、ついに刊行

吉本隆明全集

第37巻
第13回配本

《全38巻・別巻1》

第二期刊行スタート！

『試行』単独編集、試行出版部創設、『初期ノート』刊行、「全著作集」刊行開始――1962～68年の頃が白熱の核心となる川上春雄宛全書簡156通、および川上春雄の吉本会見記などの訪問記録ノートやその貴重な収集資料を収録。　予価6480円

晶文社　〒101-0051 千代田区神田神保町1-11　Tel.03-3518-4940　価格税込

選択しないという選択
ビッグデータで変わる「自由」のかたち
キャス・サンスティーン／伊達尚美［訳］　本体2700円＋税
来たるべき世界は効率的なユートピアか？　見えない強制に満ちたディストピアか？

ジャック・デリダ　動物性の政治と倫理
パトリック・ロレッド／西山雄二・桐谷　慧［訳］　本体2200円＋税
デリダが人生の最後に発明した「動物－政治」概念から、「動物の民主主義」を考える。

地方自治と図書館
「知の地域づくり」を地方再生の切り札に
片山善博・糸賀雅児　本体2300円＋税
地方自治や地域づくりの観点から公共図書館のあり方を提言。地方自治体・図書館関係者必読。

勁草書房（けいそう）　TEL 03-3814-6861　FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
http://www.keisoshobo.co.jp

日本のありふれた心理療法
ローカルな日常臨床のための心理学と医療人類学
東畑開人 著　欧米の心理療法モデルに対して現場レベルで妥協され，変形し，語り難いものとなった心理療法こそ日本のありふれた心理療法である。**3400円**

アスリートのこころの悩みと支援
スポーツカウンセリングの実際
中込四郎・鈴木　壯 著　身体面での行き詰まりを心理面から変えサポートする心理臨床実践の取り組みを紹介。**2500円**

アクティブラーニングを成功させる学級づくり
「自ら学ぶ力」を着実に高める学習環境づくりとは
河村茂雄 著　子ども達の才能が最大限に伸びるALを実現させるための，学級づくりの理論と実践方法を解説。**1800円**

誠信書房　東京都文京区大塚3-20-6　TEL. 03-3946-5666〈税別〉

団姫（まるこ）流　お釈迦さま物語
●露の団姫　落語家で尼僧の著者が綴った異色のブッダ伝。楽しく読めて生き方が学べる。
定価（本体1500円＋税）

日蓮の立正安国論　現代日本語訳
●正木　晃　初心者向けの極めて明快な訳で、歴史的名著を日蓮の意図したとおりに正しく理解できる。
定価（本体2000円＋税）

春秋社　東京都千代田区外神田2-18-6　☎03-3255-9611　FAX 03-3253-1384
http://www.shunjusha.co.jp/

臨床哲学対話 いのちの臨床

木村敏対談集1

「臨床」のエキスパートたちとの対話を通して明らかにされる臨床哲学の妙味。2017年6月 対談集2（哲学篇）刊行予定。 **2900円**

〈ポスト・トゥルース〉アメリカの誕生

池田純一

ウェブにハックされた大統領選

選挙後「〈ポスト・トゥルース〉の時代」と名付けられた現代に誕生した、今までとは異なる新たなアメリカを描く。 **1800円**

列島語り 出雲・遠野・風土記 赤坂憲雄＋三浦佑之

出雲の歴史に古の敗者たちの声を聞き、遠野の伝承に語りのもつ意味を見つめ、風土記から忘れられた人々の息遣いを掘り起こす。 **2000円**

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829 http://www.seidosha.co.jp/（価格税抜）

近代日本の洋風建築

藤森照信

藤森論文の集大成！

主に文献学だった近代建築史に、建物の調査や関係者への取材を取り入れたフジモリ流建築史。そのエッセンスを全2冊にまとめる。図版多数。

【開化篇】本体3800円＋税 【栄華篇】本体4000円＋税

筑摩書房 サービスセンター 048-651-0053 ＊価格は定価（本体価格+税）
http://www.chikumashobo.co.jp/

創元社
［創元ビジュアル科学シリーズ］

A・ハート＝デイヴィス［著］／山崎正浩［訳］

パブロフの犬
実験でたどる心理学の歴史

ダーウィンのミミズの研究からピアジェ、ミルグラムまで。

◆210×152ミリ・並製・176頁・定価（本体1800円＋税）

A・ハート＝デイヴィス［著］／山崎正浩［訳］

シュレディンガーの猫
実験でたどる物理学の歴史

古代ギリシアの四大元素から、ヒッグス粒子検出実験まで。

◆210×152ミリ・並製・176頁・定価（本体1800円＋税）

〈本社〉大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
〈支店〉東京都新宿区神楽坂4-3 Tel.03-3269-1051

大嶽秀夫

フェミニストたちの政治史

参政権、リブ、平等法

一九世紀から一九六〇年代アメリカの「リブ」、そしてバックラッシュの危機にある現代にいたる女性たちの闘いを通覧し、政治史のなかに位置づける。

3200円

東京大学出版会
〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
http://www.utp.or.jp/〈価格税別〉

2017-2018年版

哲学・思想図書総目録

哲学・思想一般 / 倫理学・人生論 / 美学 / 各国哲学 / 現代哲学 / 宗教一般 / 主教学 ほか

心理図書総目録

心理総論 / 基礎心理 / 発達心理 / 教育心理 / 臨床心理 / 精神分析 / 社会心理 ほか

社会図書総目録

社会一般 / 家族社会 / 地域社会 / 産業労働 / 福祉教育 / 社会心理 / 社会問題 / 文化文明論 / 文化人類学 ほか

◎A5判・平均245頁 ◎頒価本体各286円

人文図書目録刊行会
〒162-8710
東京都新宿区東五軒町6-24
トーハンビル内

非行・犯罪の心理臨床

藤岡淳子 著

▼こころの科学叢書

長年、少年鑑別所、少年院、刑務所で非行少年・受刑者の査定と教育に携わってきた第一人者が、非行犯罪臨床の実際を平易に綴る。

◎2000円＋税

■アスペルガー理解の決定版！

アスペルガー症候群の大学生

教職員・支援者・親のためのガイドブック

ローレヌ・E・ウォルフ ほか著
藤川洋子 監訳　渡邊哲子・本山真弓 訳

◎3000円＋税

日本評論社
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL：03-3987-8621　https://nippyo.co.jp

法政大学出版局
http://www.h-up.com/

長沼美香子 著

訳された近代

文部省『百科全書』の翻訳学

明治初期に文部省主導で進められ、最先端の西洋文明を紹介した全97編の『百科全書』翻訳出版事業を概観・分析する、初の翻訳学的研究。　5800円

《シリーズ・キーワードで読む中国古典 4》

治乱のヒストリア

華夷・正統・勢

伊東貴之 編／渡邉義浩・林 文孝 著　自らと他者を区別する華夷。現在の政権でも問われる正統。権力の勢威や歴史的趨勢を表す勢。中国の政治思想、文化、歴史を問い直す。　2900円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03（5214）5540 ／表示価格は税別です

【メルロ＝ポンティ哲学者事典（全３巻＋別巻１）】第１回配本

メルロ＝ポンティ哲学者事典 第三巻

歴史の発見・実存と弁証法・「外部」の哲学者たち

モーリス・メルロ＝ポンティ 編著
加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷 均、加國尚志 監訳

マルクス、ニーチェ等、主に19～20世紀に活躍した300名超の哲学者たちを立項解説。　本体5400円＋税

【続刊】第二巻　◎5月下旬刊行予定

白水社　東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ／ fax.03-3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp/

エコノミックス マンガで読む経済の歴史
グッドウィン著／バー画　世界の経済三五〇年が早分かり！親子で深く愉しく学べる新しい経済書。脇山美伸訳　三三〇〇円

アメリカ経済政策入門 建国から現在まで
コーエン／デロング　高関税、補助金、インフラ…。建国から現在のしたたかな政策を読み解く。上原裕美子訳　二六〇〇円

生物科学の歴史
モランジュ　分子生物学者で歴史・哲学の研究者が現代生物学に至る歴史と生命思想の流れを解明。佐藤直樹訳　五四〇〇円

量子力学と経路積分 新版
ファインマン／ヒップス　ファインマンにふれ、量子力学を見直す名講義の新版。スタイヤー校訂　北原和夫訳　五六〇〇円

みすず書房（税別）
東京本郷5-32-21 http://www.msz.co.jp

ポイエーシス叢書70
嘘の歴史　序説
デリダ 著／西山雄二 訳
晩年のデリダが1997年におこなった講演録。プラトン、アリストテレス、ルソー、カント、ニーチェ、ハイデガー、フロイトを参照しつつ、時代や文化によってことなる嘘の概念の歴史を問い、とりわけアーレントとコイレのテクストを読解する。1800円

ポイエーシス叢書69
最後のユダヤ人
デリダ 著／渡名喜庸哲 訳 1800円

ポイエーシス叢書68
信と知 たんなる理性の限界における「宗教」の二源泉
デリダ 著／湯浅・大西 訳 1800円

長倉洋海写真集
Hiromi Nagakura
A4変型判上製クロス装函入 14000円

未來社
〒112-0002東京都文京区小石川3-7-2
TEL03-3814-5521　FAX03-38145596
http://www.miraisha.co.jp/　※表示は税別

フランクルの残した創作劇、初の邦訳刊行
V・E・フランクル著
もうひとつの〈夜と霧〉
ビルケンヴァルトの共時空間
諸富祥彦／広岡義之編　広岡義之／林峠伸二訳
＊四六判上製カバー208頁　本体価格2200円

ミネルヴァ書房
〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296　価格税別／宅配可

演出された権力、荘厳された権威。
天皇の力のありようを美術作品から照らし出す！
天皇の美術史 全6巻
好評刊行中　A5判／各3500円　『内容案内』送呈

❷ **治天のまなざし、王朝美の再構築**【鎌倉・南北朝時代】
伊藤大輔 著

❺ **朝廷権威の復興と京都画壇**【江戸時代後期】
五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明 著

吉川弘文館　東京都文京区本郷7-2　☎03-3813-9151／税別

2017年4月25日発行　年3回発行　第126号
発行所　人文会
〒113-0033　東京都文京区本郷5-32-21　みすず書房内
編集協力　アジール・プロダクション
印刷　中央精版印刷株式会社
〈非売品〉